

その若き我に似たれば木木の芽を生命のごとく
なつかしむかな

たた一人泣かんとて來し松林こゝにも人の往き
かひてをり

いらたゝしき心に見やる海原に大浪たたす物た
らぬかな

忘れ得ぬ事おほかりきかくとのみ書きとどめた
る今日の日記かな

今日もまた昨日のごとく過すらし髪のかたちの
つゆもたかはぬ

わか髪の思ふがまゝに結はれしに心たらひぬ初
夏の朝

櫛の齒のあとありゝと前髪に見ゆるうれしき
湯上りのあと

何となく落ちぬ心地うつくしき櫛をさしぬと
いふことに

あたらしくペンとりかへし書き心地あらぬ人に
も文かきて見つ

月白う櫻こぼるゝ春の夜は秘めたる夢もかたら
まほしき

湯上りのすかくしさにうかれ來て飴細工など
買ひし縁日

いさゝかのの足袋のよごれのそれにだにしづ心
なきこの日ころかな

坂道をくだる車のこゝちにて過こしがたなき我
れの一生

水 鳥 横井まきの

水鳥と我ひとりどがはてしなきみ空のもとにも
だしあふかな

相もたし互互の思ひ出をたとりてあれは蛙なき
いづ

浪の音と太陽の光とにむかひる我的小さゝか
なしいかなや

三保がさき清水に通ふ出で舟を待つま淋しき旅
の夕暮 (以上三保にて)

山そひの村に煙の立ち初めぬまた力なき生がは
じまる

ほかゝと春の光の吸はれゆくさ青の草のゆた
けきふくらみ

二百里をへたてゝ母を慕ふ子が夕々にあけて見
る窓

ひるの雨に少し濁れる川の水おほる月夜にうす
光する

亡き人のくしげに残る櫛のはにからみ合ひたる
毛すじ悲しも

惜しげなく櫛をボキリと折り捨てぬ髪のもつれ
の悲しうなりて

わけもなく腹立たしうて折りし櫛またつきて見
る悲しき心

髪 安 吉 ます

風そよと若葉のかげにふき入れば洗ひ髪よりつ
げの櫛おつ

女子を見れば忍ばる桃色の輪櫛をほしとおもひ
たるころ